

はじめに

薬は医療になくてはならないものである。昔から薬なくして医療は成り立たなかったが、特に近年はその傾向が強くなっている。薬というのは、私たちが病気と闘い、また健康を保つうえで、大切な人類の宝とでも言うべき財産である。薬理学というのは、そんな薬が、どのようにして身体の中で効果を現すのかを解き明かす学問であるが、学生の間では、苦手意識を抱く人が多いようである。それは何故だろうか。

その原因として、色々な可能性が考えられるが、まず第一に、医療に用いられている薬の種類がとて多いということが挙げられよう。現在、処方箋に基づいて使用される医療用医薬品の成分は2,000種類以上あるが、いきなりそんな数の薬を前にしたら、誰だってやる気が失せるに違いない。名前を覚えるだけでも大変だ！それが偽らざる気持ちだと思う。そして二番目は、化学構造式だろうか。2,000もの薬の化学構造式を頭に叩き込まなければいけないとしたら、どんなに薬理学に興味があっても、気が遠くなって当然だ。

でも、これらは誤解である。実は、薬理学の基礎を身につけるためにきちんと理解する必要がある薬は精々100種類くらいだし、創薬研究者や特殊な領域の薬剤師でもない限り、薬の化学構造式を覚える必要はない。これは本当である。そう言われて、薬理学に少しは親しみを感じて頂けたらどうか。

医療を円滑に進めるうえで、すべての医療従事者がある程度の薬理学の素養を身につけているということは、極めて重要である。一方、最近では、少しでも高度な医療を受けようとする、誰もがインフォームド・コンセントを求められるし、また時々薬の副作用が世の中を騒がせたりもするので、一般の人たちにも、薬の作用に興味を抱く人が増えてきた。したがって、薬理学の知識や考え方は、医療に携わる人たちだけでなく、広く一般の人たちにも提供されるべきであろう。



本書は、初めて薬理学に接する人に、楽しみながら薬理学の世界に入って行けることを意図して企画された。主な用途として、看護師や臨床検査技師などのメディカル・スタッフを育成する医療系学部における薬理学の教科書を視野に入れているが、それだけ

でなく、薬についてもっと知りたいと考えている一般の人たちにも利用して頂けたらと思っている。また、医学部・薬学部の学生や、実際に医療の現場で活躍している医療従事者の方々が、薬の作用機序の確認用に使うこともできるように、内容には十分な配慮をするとともに、薬理学のエッセンスを、なるべく分かりやすい言葉でコンパクトにまとめるよう心掛けた。

本書は、どこから読み始めても構わない。各章は独立した内容で構成されているので、いきなり自分が興味を持っている病気やその治療薬に関する記述を読んでも、それなりの理解は得られるはずである。ただ、できることなら、まず初めに第1章を読んで頂きたい。第1章で薬理学の基本的な考え方を学んでから他の章を読んだ方が、理解しやすいと思うからである。本書によって薬理学への第一歩を踏み出し、広大な薬理学という学問領域に少しでも興味を抱いて頂けるなら、著者として望外の幸せである。

このような形で著者の薬理学教育への思いを形にしてくれた羊土社の方々に、心よりお礼を申し上げたい。特に、企画から具体的な内容の相談に至るまで、根気よく懇切丁寧に対応して下さった山下志乃舞氏と、仕上げの過程で多くの的確な助言を頂いたばかりでなく、美しいイラストを作成して下さいた間馬彬大氏には、言葉では言い尽くせないほどお世話になった。この場をお借りして、厚く感謝の意を表したい。

最後に、家族（特に妻）への謝辞を申し述べることをお許し頂きたい。家族の応援がなかったら、本書を書き上げることはできなかつただろう。執筆のために、家族と過ごすべき多くの時間を削らざるを得なかつたが、本書の完成により多少なりとも時間的な余裕ができたなら、その埋め合わせをしたいと考えている。応援、ありがとう。

2013年11月

石井邦雄